

西行の草庵を訪ねて その簡素な生活の豊饒な意味

著者	William LaFleur
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究 別冊
号	4
ページ	111-116
発行年	2010-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005209/

西行の草庵を訪ねて——その簡素な生活の豊饒な意味

ウィリアム・ラフルーア（ペンシルヴァニア大学）

まずはじめに、環境哲学に関するこうした大事な会合に、お招きいただいたことに感謝を申し上げたいと思います。東洋大学の後援と、私をご招待いただき、この発表の準備に大変ご助力いただいた竹村牧男教授に、心より感謝いたします。

また、ここで西行についてお話するにあたって、長年の間裨益（ひえき）をこうむった多くの日本人の学者と詩人にも、感謝を表したいと思います。馬齢を重ねましたけれども、西行の和歌に対する自分の理解が浅いものだということは分かっております。なにとぞ勘違いや誤解をお許し下さいますよう、お願い申し上げます。また、キーン先生は、我々日本学の研究者にとって、常に模範であられました。今日、ここで一緒にできるのは、大変光栄です。

さて今日、自然観についてお話することは、以前とは異なり、大変難しいことです。私たちは、人間自身と他の生物のすみかである自然を、恐ろしい力によって破壊し続けています。そして、いわゆる「先進国」のライフスタイルなるものが、地球のシステムとバランスを破壊することに気がつきつつあります。

こうした状況を踏まえた上で、西行の自然観の一端をお話したいと思います。私が思うに、西行は日本のみならず世界でも、もっともすぐれた詩人の1人です。今日、想像の中ではありますが、皆さんと一緒に、山の中の西行の草庵を訪ねることにしましょう。今日の私たちが自然を理解して、自然と関わる方法について、今なお西行が教えてくれることに、その和歌を通して耳を傾けたいと思います。

今から40年ほど前、私が西行についての研究を始めた1970年は、世界で最初の「アースデイ」（3月22日、国際連合によって定められた日）を祝った年でした。当時でも西行は自然について大事なこと——今で言うエコロジー——を語っていると、感じたのですが、この確信は時が経つにつれ、深まってまいりました。私は、日本のみならず世界中で人々がたとえ想像の中だけでも、西行の草庵を訪れることは、今日的な大きな意義があると信じています。西行の詩は、文学的にはもちろん世界的なレベルにあります。さらに自然世界についての貴重なメッセージを与えてくれるものです。私が思うに、それは日本のみならず、この地球上のすべての人にとって、貴重なメッセージであります。

西行は、自然をととても大事に考えておりました。彼は、自然に近い簡素な生活を熱望していました。その一方で、院政守護の北面の武士の1人として、目の当たりにする輝かしい宮廷生活とその文化に惹かれていました。彼は、生涯の大半を、この葛藤に悩んで過ごし、出家した後もずっと悩んでいました。しかし結局の所、「みやこ」文化からは、人が真に必要なとするものは得られないという結論に至りました。

彼は、次のように詠んでいます。

miyako nite	都にて
tsuki o aware to	月を哀れと

omoishi wa	おもひしは	
kazu yori hoka no	数よりほかの	
susabi narikeri	すさびなりけり	sks460/skks937 AN90

ここでの月は、西行の自然観のあらわれですが、さらには仏教者としての修行——たとえば月輪観——の対象でもありましょう。いずれにせよ、この歌は、自然の中での深い洞察によって捉えられた月と、都で眺めた月との鋭い対比を物語っています。都の人々が月を見たときの「哀れ」などというのは、単なる退屈しのぎの暇つぶし（「ささび」）でしかない、と語っているのです。

この西行の歌の「哀れ」というのは、それぞれがすべて固有の価値を持つものとして、彼が見たすべての事象を含んでいます。大事なことは、この歌が西行当時の人々に対してだけではなく、現代の私たちにも鋭く問いかけてくることです。つまり、たとえば私は、ある意味で現代の「みやこ」——文字通りの「首都」ということではなくて、「物質的な豊かさを誇る文明」という意味の「みやこ」——に、住んでいると言わざるを得ません。私の目と魂は、現代の都市文化と、暇つぶしでしかない多くの気晴らし（「ささび」）にうんざりしているのです。

私たちが、西行の知る「哀れ」の深さを知るためには、「先進国」の超消費社会を生きる自己と対極にある「哀れ」なる自己を獲得するためには、少なくとも田舎に暮らすことが最低条件です。思うに、この歌は私たちに自己反省を促します。ここで、考えなければいけない問いとは、次のことです。

「人間が深いレベルで必要とするものを与えてはくれないと、西行が感じた「みやこ」の文化にあたるものは、現代生活において一体何なのだろうか？」

ご存じのように、西行は、光り輝く王朝文化であった平安末期を生きた人です。それは、都会的で優雅なライフスタイルの時代でもありました。日本を学ぶ我々は、王朝貴族社会のみやびの華麗さ（平安時代の高貴で優雅な社会の輝き）に、簡単に魅せられてしまいます。もちろん、12世紀日本の王朝社会は「経済的な欲求を至上として美しい自然を汚染・破壊してきたりした」現代社会ではありません。それでもやはり、西行と幾人かは、その社会に欠けた深刻な問題を発見し、その価値を見つけました。11、12世紀の世界標準では、平安京の社会は、とても「進んだ」いわば当時の先進国であり、恐らくは超先進国の文化を持っていました。

しかし、目崎徳衛氏のような研究者が詳細に明らかにしたように、この輝かしい平安社会と価値観はまた、その社会に満足しない人々をも生み出しました。さまざまなレベルで、それぞれのありようで、彼らは疎外感を覚えました。その存在は多様であり、それに応じていろいろな言葉があります。たとえば、数奇者、遁世者、隠者、隠遁者、世捨人、などです。なかには、都市から離れて郊外の屋敷に移り住んだものの、贅沢で消費的な生活スタイルにとどまったままの者もありました。対照的に、西行は、このような郊外への引っ越しは中途半端であると思ったようです。「先進的」で「輝かしく進んだ社会」に対する西行の批判は、もっと痛烈でした。

西行は、人間の魂が最も深いところで求めるものは、こうした「世の中」からは決して与えられないと考えていたようです。「みやこ」の人々は、「あわれ」を知っていると言いますが、西行によれば、そうではありません。もちろん、西行は欲望（煩悩）の強さを知っていましたが、自然から阻害されると、人間の欲望——文字通り「消費への欲望」——は、その人自身を消費するものだとし唆しております。

私が、西行の思想でもっとも重要であると思いますのは、私たちが人工物の中に閉じこもることで、より輝きと価値を持つ自然界、人間が作ることでできない自然を拒否しているのだと、西行が分かっていることです。「自然」という漢字は「自（おのずか）らなる」ということであり、人工物ではないという意味です。しかし、残念ながら皮肉にも、今日私の国の文学研究者は「結局のところ、自然も人工物にすぎない」と考えています。この考えは、自然を矮小化するものです。現代社会の価値観にべったり自足している学者が、富と権力をもたらすのであれば、経済と科学技術を利用して自然を搾取していいのだと考えるのです。私は、「自然は人間の作り出したものに過ぎない」といった見方に賛同できません。

西行の魅力は、その歌の美しさだけでなく一例えば、月や、吉野の桜の美しさです。よく言われるように、その歌に人生が反映されていることです。その歌には、「みやこ」の生活から離れた苦難と、新鮮な目で自然を見て、自然を深く理解する人間になったことが見られます。とはいえ、この境地に至るまでに、彼は大変な孤独に耐えました。自然とひとつになるための孤独の苦しさ、それと相矛盾する孤独に耐え忍ぶという目標、その両方が、次の歌にあらわれています。

sabishisa ni	寂しさに	
taetaru hito no	堪えたる人の	
mata mo are na	またもあれな	
iori naraben	庵ならべむ	
fuyu no yamazato	冬の山里	560/627 p.94

多くの歌の中で、西行は自然との一体感を求めて、世間的実利を求める人間から遠ざかろうとしています。彼の歌は、この希求であふれています。彼の仲間、「とも」として、折に触れてうたわれるのは月、ほととぎす、鶯、蟬、虫、松、雁、鹿、猿、露、蝶、竹、梅、草、蛙（かわず）、氷、柳、雨、きりぎりす、鶯、葦、そしてもちろん、桜です。

この「とも」は何のことでしょうか？ 現代の街に住んで慣れ親しむものといえば、コンクリート、鉄、エスカレーター、コンピューターのスクリーン、ゴミの巨大コンテナといった私たちにとって、一体「とも」とは何でしょうか？ 例えば、ロボットも我々と交流できますし、まるで人間であるかのように、ロボットは自然ではなく人工物でしょう。西行の友であった自然の生物と、現代人のロボットのように自然を模して作られたものとの間には、根本的な違いは存在しないのでしょうか？

もし、我々が今日西行の草庵を訪ねたら、彼は、自然界を守らずに自然のものに似せてモノを作り出す、現代人の自己欺瞞を指摘するのではないのでしょうか。

いかにして「仏教徒」は、自然と真に深い繋がりをもつのでしょうか？ 西行に関しては、多くの議論があります。家永三郎氏の初期の重要な著作『日本思想史における宗教的自然観の展開』では、西行の仏教徒としての在り方に疑問が投げかけられております。家永氏は「西行を真に救ったものは、如来ではなくて、自然であったということが出来、この意味で彼は仏徒であるよりもまず「自然」の信徒にあったとせらるべきであらう」¹と述べています。

これは複雑な問題ですが、私は、目崎徳衛氏の意見²、“西行は自然に深い宗教上の意義を見るものであ

¹ P.16.

² p.139 of 目崎徳衛著、『西行の思想史的研究』

って、「とも」として自然を見る擬人的手法にとどまるものではない」という意見に、賛成したいと思います。この我々の時代、人間の食欲によって自然界が破壊されているこの時代にこそ、次の歌は感動的な深い意義を持ってまいります。

“On Seeing a Tree standing in front of my Hermitage: 「我が庵の前に立つ木を見て」

hisa ni hete ひさにへて
waga nochi no yo o 我が後の世を
toe yo matsu とへよ松
ato shinobubeki 跡忍ふへき
hito mo naki mi zo 人もなきみそ

SKS 1449

もちろん、この歌も日本の古典文学における多くの歌と同じく、画家であり芸術評論家であるジョン・ラスキン (1819～1900、自然をありのままに再現することを至上とする) が、1856年に「感傷的虚偽誤謬」と称して、文学と芸術から除外されるべきであると断言した法則、擬人化禁止の法則とは、真つ向から矛盾します。ラスキンは、動物や人間以外のものを擬人化することに反対しました。幸いなことに、世界の詩人たちは、もしラスキンの法則に従ったら、詩を書くことは不可能だろうと直観していました。さらに喜ばしいことには、今日の科学者たちは、動物にも感情のみならず倫理観があることを、解明しつつあります。たとえば象は、親の遺体、ときには遺骨にまで「敬意」を表しますし、『野生の正義』という新刊書では、動物における倫理的責任感が論証されています。

確かに、西行がラスキンの法則を守っていたら、動物や自然の事柄を「とも」とする歌を書くことはなかったでしょう。そうならなかったら、私たちは西行のすばらしい歌を失ったというだけではなく、現代世界に意味を持つ、宗教的で哲学的な視点をも失っていました。生物や自然を我々人間の「とも」と看做すことは、人類が彼らと共に存在するということであり、他種の存在なくしては、私たちは生きていけません。これが、責任ある環境哲学、エコ・フィロソフィの中核です。さらに、この認識から宗教的な問題が生まれてきて、「救済」の意味がはっきりします。「救済」とは、すなわち縁起であり、最善の形での循環であります。人間は自然の保護者・救済者であらねばならない、なぜなら自然は、結局のところ人類の保護者であり、救世主であるからです！ 自然の「救済」なくしては、我々の生活は大いに減退してしまいますし、未来世代は生活していけないでしょう。アメリカでの私の学生たち、なかでも自然破壊を心配する学生が、もっとも共感する西行の歌（たとえ英語であっても）は、次のものです。

iwa tsutai 岩つたひ
orade tsutsuji o 折らでつつじを
te ni zo toru 手にぞとる
sakashiki yama no さかしき山の
toridokoro ni wa とりどころには SKS184 AN82

つつじを折らずに残すことが、文字通りの意味で、詩人の命の恩人（とりどころ）になるのです。折ってしまったら、つかまる枝がなくなって、山から落ちてしまうでしょうから。

我々自身の「とりどころ」を保護することは、今や絶対的に必要です。このことについて、まったく疑いはありません。もし現代の消費者社会のライフスタイルから守られなければ、海、川、空気、自然のすべては、破壊されてしまうでしょう。これは、いわゆる「先進」(国)である我々の社会の大きな皮肉です。我々はいわゆる「先進・発展」とは何であるのか、本気で考えなくてはいけないのではないのでしょうか？消費経済における指導的位置にある国々は、現今のぜいたくな消費レベルに執着することを止めなくてはなりません。

王朝貴族社会のみやびの華麗さから抜け出すことが、どんなに難しかったとしても、西行は、最終的には抜けだしました。この離脱はとても苦しいものでしたし、彼の歌はこの苦しみの記録なのです。生活の質を落とすことは、簡単なことではありません。都での生活に慣れた人にとって、最低限の生活必需品と、とても簡素な生活で満足することを学ぶことは、当然ながら、苦痛に満ちたものでした。私たちや子供たちが、近年慣れ親しんだ贅沢な生活を止めて、非常に簡素な生活を送らねばならなくなったら、西行の離脱と同じく困難であり、苦痛でさえあるでしょう。この事実を認めなくてはなりません。

西行は、輝かしい平安時代の最後の世紀に生きました……しかし、彼はこの輝かしさが終りに近づいていることを見てとりました。西行は、日本中世の主流となった価値観とさらには美意識を、自覚的に身につけたのだと考える学者もいます。西行は、そうした美学の先駆者でした。晩年の歌には、さびとわびが見られます。『古今集』に比して『新古今集』を特徴づけるものは、なによりもまず、西行の和歌です。大岡真は、『新古今集』の編者は、西行の秋と冬の歌を好んでいたことを述べています³。西行の時代に、日本の美意識は、変わりつつありました。日本人の自然観は深まりつつあり、あでやかな錦の色だけではなく、西行の歌に見られるような簡素な事柄にも、たとえば鶯色 (tobi-iro, dram) にさえ、深い意義と慎みの念を見いだしつつありました。

furu hata no	古畑の		
soba no tatsu ki ni	そばのたつ木に		
iru hato no	ゐる鳩の		
tomo yobu koe no	友よぶ声の		
sugoki yûgure	すぎき夕暮	SKS1639	AN54.

そして、もちろん一番有名なこの歌です。

kokoro naki	心なき		
mi ni mo aware wa	身にもあはれは		
shirarekeri	知られけり		
shigi tatsu sawa no	鳴たつ沢の		
aki no yûgure	秋の夕暮れ	SKS 515/ 362	AN 67.

贅沢品であふれている消費社会——錦を好む社会——で暮らす私たちが、簡素な環境、言ってみればより「中世的な」環境に満足して暮らすためには、どうすればよいのでしょうか。新しい自制心を学ぶことで、自然の「秋の夕暮れ」のような簡素なものに、落ち着いた飾り気のない美を見出すことができるのでしょ

³ In 山本健吉著『自然と芸術』p.51.

うか。

おそらく地球を真に「救済」するためには——より正確には、真の宝である自然界を救済するためには——、私たちとその子供たちが、今の肥大した消費生活を強制的に変えなくてはなりません。限りなく欲望を増大させていくことで成り立つ、今の経済システムも変えなければならないでしょう。

私は、自然に価値をおく伝統的な日本の道が、人類が緊急に必要としているエコ・フィロソフィに大きく貢献できる、と確信しています。なかでも西行は、自然破壊の深刻な危機に対処するために、最大の貢献をしてくれると思います。

ご静聴ありがとうございました。皆様と私が、未来世代もこの惑星で住めるように、また自然界に対して、環境という問題意識を共有していることを信じております。